

## 資料紹介

### 線彫染付魚文皿のことなど

★  
宮城篤正

数ある当館の資料の中からある特定のものにしぼって紹介することにはいくつかの理由とか目的があろうかと思う。筆者の場合はあまりむつかしくは考えていないが、少なくとも次にあげるいくつかの項目のどれかに該当する資料を紹介することになる。

まず、①名品であり、改めて紹介しておく必要がある資料。②従来いわれてきたことに対して新しい見解または新資料とか文献等の発見によって訂正の必要が生じた資料。③新しい資料で特に紹介しておく必要性が高い資料。④名品ではないが、資料的価値がきわめて高い資料等が考えられる。

博物館における学芸員の研究分野に各担当による資料研究があげられる。これはただちに展示へ反映できるのできわめて基本的な研究であるといえよう。と同時に資料紹介によってその分野の研究者は勿論のこと、一般の人々が勉強したり、活用する際に少なからず役立つものと思う。

そこで前述のことをふまえて、二、三の資料について紹介してみようと思う。



写真1 線彫染付魚文皿  
伝仲村渠致元作、県指定文化財

#### 線彫染付魚文皿

伝仲村渠致元作 湧田窯系 18世紀

県指定文化財

寸法 高さ5.4cm、直径24.8cm

1958年、沖縄歴史研究家として著名な東恩納寛惇氏が当館に寄贈した当時、この「線彫染付魚文皿」は仮箱にはいっていた。杉板のフタの内側に次のよ

うな墨書きがある。(原文はタテ書き)

此皿本来尚家ノ秘蔵ニテ

尚典侯ヨリ尚旦君ニ頒与サレ

シヲ尚旦君ヨリ東恩納ニ

贈ラレシモノ也

東恩納寛惇

印

このようにたとえひとつの資料の伝来といえども、しっかり記録して残すという姿勢には流石一流の歴史家だと感心した。

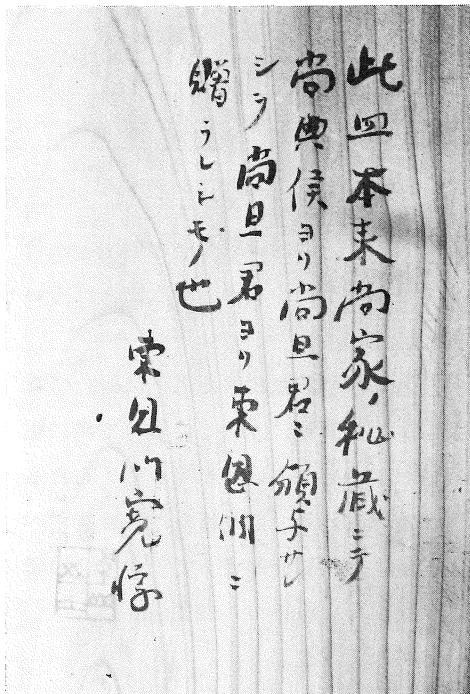


写真2 線彫染付魚文皿の箱書

実はこの皿が名品である以上に前記の資料（箱書）が見つかったことによって、ここに訂正を兼ねて紹介することになった。

筆者が当博物館に勤務して陶磁器を担当するようになった頃にはすでに皿と仮箱とは分離してしまっていた。考えられることは過去における博物館の移転、収蔵庫等の不備によってたび重なる移動等ごたごたしたことが多かったことと、それに加えて仮箱であったことに大きく起因しているように思われる。いまではこの仮箱を大事に取扱って再びこの仮箱に納めている。この箱書き（写真2参照）によってこの皿の来歴がはっきりわかったのであるが、それまでは東恩納氏が本土の骨董店で購入したものといわれていた。ところが収蔵庫内で資料整理の作業中に偶然筆者が発見したことによってそのことがくつがえされたのであった。

この作品は琉球国時代の名陶工仲村渠致元（1696～1754）作と伝えられている。彼の童名は真浦戸、唐名を用啓基という。そして代々陶工の家系に生まれ、致元もまた幼少の頃より才能が認められ、長ずるに及んで琉球の代表的な陶工となった。

尚敬王時代にいろいろ活躍をする。すなわち、1724年、王命を受けて八重山島へ壺焼並びに上焼物之法の指導のため派遣され、彼地に4年間滞在して製陶法の指導を行なった。

次いで1730年（雍正8）再び王命によりこんどは薩摩へ陶技研修のため派遣されている。薩摩では朝鮮陶工について大鉢、天水壺など大きなものを作る技術を習得して帰国、その後は沖縄陶業界の刷新のために尽力した。彼は大きな功績を残したので琉球陶器中興の祖と仰がれている陶工である。

沖縄の陶業の場合、官窯と民窯とが分離してなく、両面を兼ねた。だから御用品を製作して納める一方、他方では一般庶民が使う日用雑器等も生産したのであった。

多くの陶工たちがたくさんの製品をつくってきたが、それらは殆んど製作者の名前はわからない。前述の仲村渠致元の他にわずかに御用陶工名が知られているに過ぎない。そして更に作者がわかっている作品はごく稀である。この魚文皿は最初に紹介した箱書きの通りであるが、東恩納氏が永年致元作として愛蔵してきたものである。

この作品の見込に描かれた魚文の描写力はなかなかたいしたものである。波間から勢いよく飛び跳ねた魚が皿の見込にうまく描かれている。それに波と波間に漂よう水鳥のさりげない表現がより一層飛びはねた魚をひきたてていて、破たんがなく全体をうまくひきしめている。

また、線彫りしたあとにゴスを差す技法は沖縄では早くから行なわれてきた。したがってこの技法は伝統的な技法として位置づけられるものである。ところが残念なことにこの技法はなかなか

行なわれないばかりか、たとえ試みられたとしてもそんなに成功した作品に出合わない。たしかにこの線彫りはむつかしいのかも知れないが、最近はあまりにも彫絵にかたより過ぎている。

筆者が思うに、この作品の線彫りの技術のよさを再評価してこそ、沖縄の陶芸の水準の高さとか特色もより發揮されてくるものと思う。 線彫りの技法ではないが、赤絵による魚文皿の傑作が他にいくつか確認されている。大正末から昭和初期にかけて鎌倉芳太郎氏が撮影した「壺屋色絵鯉

図皿」と「白釉色絵鯉雲波文大皿」二点がそれである。そのうちあの当時沖縄の工芸美術協会蔵の「色絵鯉雲波文大皿」(写真3参照)は現在県立博物館所蔵の「赤絵魚文皿」とほとんど図柄が似ている。よほど比較して細部に注意しないと違いがわからないほどである。ここでいう色絵と赤絵は同じものをさしているが、とにかく魚文は古くから好まれて使われた。この線彫り魚文皿に感動して以来、魚や海老文に感動して以来、魚や海老文を彫っている人に県指定を受けている金城次郎氏がいる。ただ金城氏の場合、線彫り

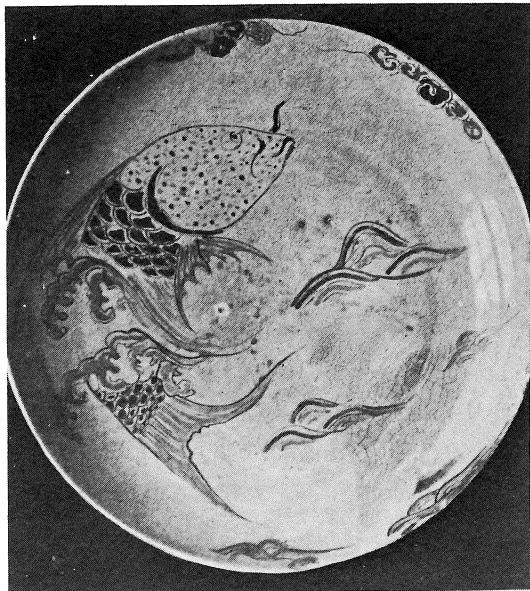


写真3 白釉色絵鯉雲波文大皿  
『世界美術全集』第27巻所収

に強い個性を投影してか太く深彫りの線を用いているので、かなり感じが異なったものになっている。 この魚文皿は熟達した線彫りの技法でもって、うまく魚、水鳥、波模様などを表現して沖縄の陶芸の水準の高さを示す作品として県指定になっている。

#### 赤絵枝梅竹文碗

壺屋窯 高さ7.4cm、口経14.5cm

18~19世紀 県指定文化財

この作品は他に類例が少なく、沖縄陶器中赤絵の最高水準を示すものである。沖縄の赤絵についてはまだ定説はないが、従来までいわれていることは1670年、尚貞王時代（1669~1709）に平田典通（唐名宿藍田）が王命を受け中国へ陶器の研究に派遣され、彼地で三年間陶法をみっちり学んで帰った。



写真4 赤絵枝梅竹文碗 県指定文化財

そのときに中国から赤絵の技術をもたらしたといわれている。そして平田典通から息子の典寛とか弟子たちにその技法を伝授して代々その技術は受け継がれ発展したのであった。

壺屋では赤絵のことを「シーヤチ」と呼んでいる。シーとは匣鉢のことで窯で焼く場合 昔から匣鉢の中へ入れて焼いたことからの呼称である。

琉球の赤絵についてかって民芸の父、柳宗悦は次のように賞讃した一文を『琉球の陶器』214—215頁に書いている。

「古い伊万里や九谷が磁器の赤絵で天下に名を成すなら、琉球は陶器の赤絵で其の名を響かせていい。其の優れたものに至ると宋窯を彷彿させる。実際琉球の白絵（白釉か）は膚が温で柔かくて其の味ひが宋の美しさに極めて近い。之に赤や緑を染めるから、知らない人が見たら宋赤絵と見間違へるであろう。私達は其の価値を高く買ひたい。(後略)」

この一文は、いかに沖縄の赤絵がすばらしいものであるかをいいたいために、中国の宋赤絵と対比させて論じている。元来中国の赤絵は図柄を簡略化してのびのびと描くのが本筋であるといわれている。このことを念頭にいれて沖縄の赤絵をみた場合、確かに古い技法の伝統を守っているといえる。

暖か味のある白化粧の肌合いの上におかれれる赤、青、黄緑などの色とのびのびとした筆致がうまくとけあって傑作を生みだすのである。

ここに紹介する「赤絵枝梅竹文碗」は数ある赤絵のなかでも特に優れた作品である。

碗の形がゆったりとしている上に枝梅文が自然でのびのびと描かれ、白化粧と赤絵がうまくマッチしている。この碗は沖縄の赤絵のよさを遺憾なく發揮している作品として広く知られている。

戦前、首里の旧家からでたといわれ、それが那覇市内の骨董店で売られていたものを森政三氏が買い求め長く愛蔵してきた。戦後、同氏から当博物館が安い値段で買い求めたものである。一時期資料収集活動は戦前に本土にわたった文化財を求めて職員を派遣したことがある。所蔵者の沖縄に寄せる深い愛情と好意で寄贈を受けた資料とか市価よりも安い値段でゆずって貰ったものも多い。

この赤絵碗を所蔵しておられた森氏は東京美術学校を卒業後、文部省技官となり国宝、重要文化財などの調査、記録、修理の担当であった。

昭和12年に来沖し、首里城の解体修理に従事した。戦後、戦災沖縄文化財を調査し、その復興計画案を作り、作業に従事し、技術指導にあたった。同氏は文字通り戦前戦後を通じて沖縄の文化財、建造物の調査保存修理活動に尽力した人である。なかでも戦争で文化財がすべて灰燼に帰したあと、建造物の復原に大いに貢献した功績は顕著であるとして第16回琉球新報賞（昭和55年度）を受賞された。（同氏は今年、昭和56年1月、85才で逝去された。）

森氏は骨董の世界にも通じておられ、この他にもすばらしい沖縄の陶器類を所有しておられる。

ここに紹介した県指定の赤絵碗の類似品が現在、他に2点確認されているので少しふれておこう。そのひとつは、終戦直後、首里城の防空壕から発見された赤絵碗である。（図1参照）残念ながら口縁部の一部が破損している（皮肉にも主要な部分である表の枝梅文の部分がおおかた欠損している）が、碗の形、絵付、赤絵の具合といい、まぎれもなく県指定の碗と兄弟分である。この事実からこの種の碗は尚王家で使用された碗であることがいえる。

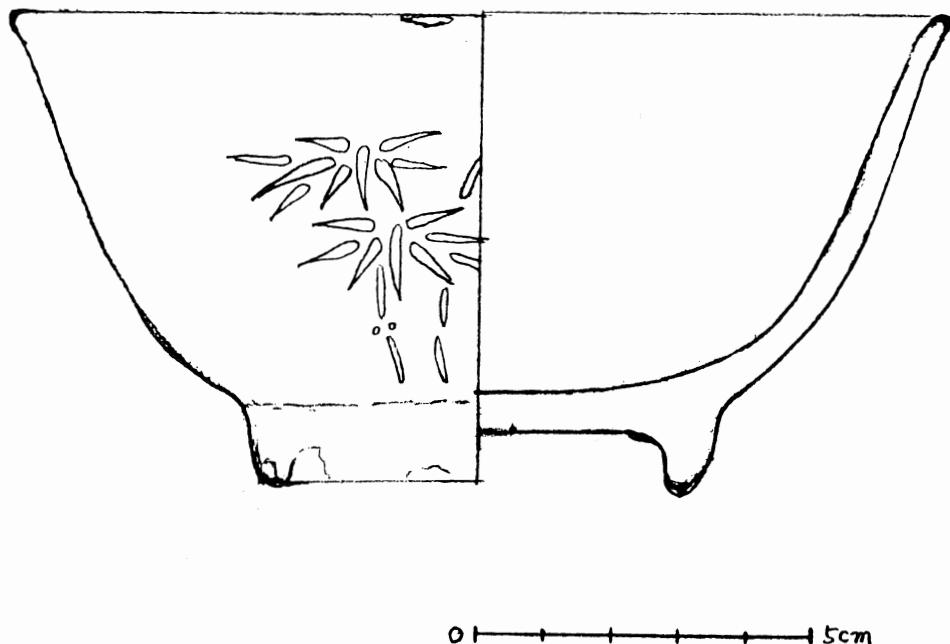


図1 赤絵枝梅竹文碗（裏面竹文）首里城の防空壕出土

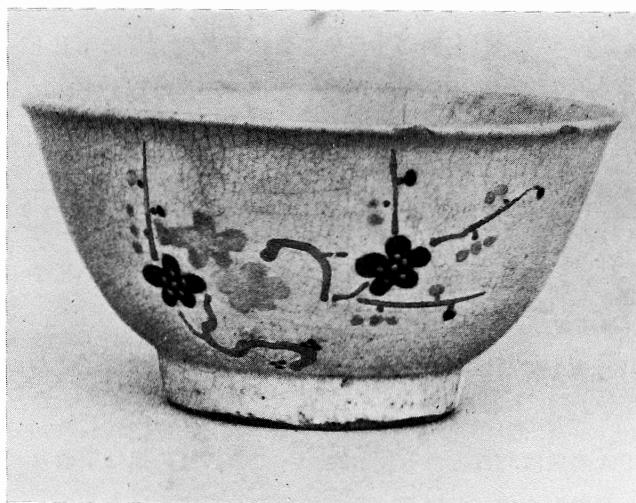


写真5 赤絵盆  
『柳宗悦全集』第5巻所収、日本民芸館蔵

他に戦前、日本民芸の鼻祖である柳宗悦によって収集された赤絵碗が東京駒場の日本民芸館に収蔵されている。この作品は『柳宗悦選集』第5巻の口絵カラーに収録されているので周知の作品であろう。（写真5参照）模様の梅に赤、桃色、黄、緑の4色を用いて描き方も全く自由である。図柄を見比べてもフリーハンドで描いてある点を勘案すると殆んど同一とみてよい。以上の三点が赤絵枝梅竹文碗であるが、沖縄の赤絵のよさと水準の高さを示す作品である。

なお、この赤絵碗の製作年代についてはこれまで19世紀とされてきたが、作為の方法とか、赤絵の落書き具合、形、図柄等総合的にみると、もっとも赤絵が完成した時代18世紀あたりをおさえた方がよいと思われる。そこで、さしあたりここでは18—19世紀とかなり時代幅をもたせておきたいと思う。



写真6 色象嵌粟絵菊花皿  
仲村渠致元作、県指定文化財

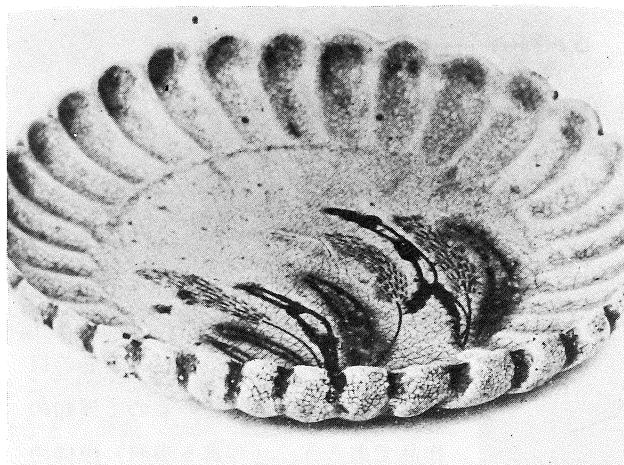


写真7 淡青釉粟彩絵菊形中皿  
用啓基仲村渠致元作『世界美術全集』第26巻所収

おそらく、同じような図柄の皿を何枚か作っておいて、出来上りのよい作品を献上したものと思われる。

大きな違いはBの皿の花弁が37枚に対してAの皿は33枚である。したがってこの種の皿は型取りではなく、花弁の一枚一枚を削り出していって器形を作っている。そうであるから成形はなかなかむつかしいと思われる。

鎌倉芳太郎氏の調査ノートのメモに前述の仲村渠致知氏（那覇市上泉町1の12）所有の菊花皿の寸法がある。そこで現在、県指定文化財になっているBの皿と比較してみた。

Aの見込みの直径が14センチに対し、Bは14.2センチ、皿の高さはAが3.7センチに対し、Bは4.4センチ、皿全体の直径がA 22.5センチに対し、Bは22.8センチ、高台の直径はAが12.1センチに対して、Bは12.8センチである。

### 色象嵌粟絵菊花皿

仲村渠致元作 湧田窯系 18世紀

県指定文化財

寸法、高さ4.4cm 直径22.8cm

この作品は線彫染付魚文皿と共に琉球王朝時代の名陶工として知られる仲村渠致元（1692～1753、唐名は用啓基）の作として知られる名品である。ただし、この作品に関しては戦前において鎌倉芳太郎氏の調査によってわかつており、しかも代々子孫に伝えられていた2枚のうちの1点である。すなわち、戦前、東京の啓明会が買い取ったものを戦後県立博物館が買い戻したものである。

昭和4年、平凡社発行の『世界美術全集』第二六巻に用啓基仲村渠致元作「淡青釉粟絵菊形中皿」（以下Aという。仲村渠致知氏所有）が収録されている。この作品は現在、県立博物館所蔵の「色象嵌粟絵菊花皿」（以下Bという。県指定文化財）とは別のものであるが、しかし、一見しただけでは殆んどその違いがわからない位に類似している。たとえば、粟絵の書き方に注目して細部をみていくとその違いにやっと気がつく程度である。

このように比較してみてわかるように A, B ともほぼ同じように作られたことがわかる。なお、仲村渠致知氏はこの皿の他に平鉢、大香炉など仲村渠致元作を所有していたといわれる。

更に鎌倉氏の調査メモをみると、石嶺の豊見城朝熙氏が仲村渠致元作の菓子皿 4 ~ 5 枚、天目茶碗など所有していたことになっている。この他、護国寺所蔵の黄褐色釉蓮華形水盤も用啓基仲村渠致元の遺作といわれている。

このようにおそらく致元の作品は戦前まで寺院とか首里、那覇の旧家にはかなりの数が伝わっていたものと思われるが、戦後は殆んど失われたりして、殆んど伝来がわからなくなってしまったのだろう。

この作品は見込みに線彫による粟絵が描かれ、その筆致は熟達している。皿全体の形、釉薬、線彫等いずれも見事で沖縄陶芸技術の高い水準を示している。